

マラルメ 「一人の黒人女が……」 注解

長 澤 法 幸

一篇の猥褻詩

象徴主義の筆頭であり、晦渋、孤高、潔癖などといった印象とともにしばしば語られてきた詩人、ステファヌ・マラルメ（1842 - 1898）⁽¹⁾。近年、この詩人の、実社会から隔絶された「象牙の塔」の住人としての人物像が必ずしも正しいものではないことが明らかになりつつあるが、この「脱」神話の作業に大きな貢献を果たしそうな、きわめて卑猥な詩が一篇存在するのである。まずは、その詩の全文を以下に引用しよう。

Une négresse par le démon secouée
Veut goûter une enfant triste de fruits nouveaux
Et criminels aussi sous leur robe trouée,
Cette goinfre s'apprête à de rusés travaux :

À son ventre compare heureuses deux tétines
Et, si haut que la main ne le saura saisir,
Elle darde le choc obscur de ses bottines
Ainsi que quelque langue inhabile au plaisir.

Contre la nudité peureuse de gazelle
Qui tremble, sur le dos tel un fol éléphant
Renversée elle attend et s'admire avec zèle,
En riant de ses dents naïves à l'enfant;

Et, dans ses jambes où la victime se couche,
Levant une peau noire ouverte sous le crin,

邪気に衝かれた一人の黒人女は
哀れな一人の少女を味わいたがる
穴のあいたロープの下の -
罪深い、若摘みの果実を、
この大喰らい、狼藉の手筈は整った。

腹と幸福な両の乳房を突き合わせて
そして、手で掴めないほど高くにまで、
女は勢いよくボティースを脱ぎ捨てる
快樂には適さない何某かの舌さながらに。

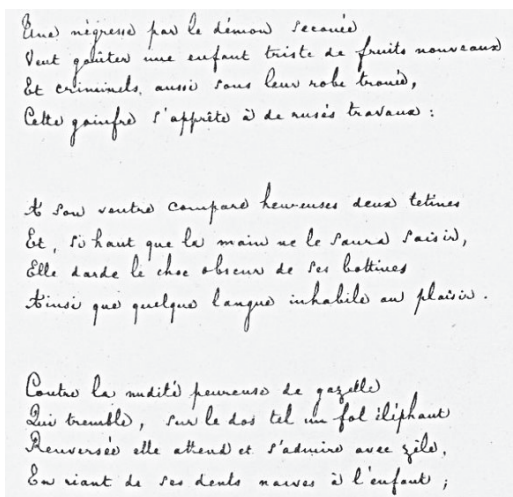
ガゼルの怯えた裸体は
震え、気の触れた象のように仰向けの女は
裏返って待ち構え、しとどに蠱^{まど}わされて、
生まれつきの歯で、少女に笑いかける。

そして、生贅が横たわる両足の中で
女は、鬣^{たてがみ}の下で開く黒い肌を揚げつつ、

Avance le palais de cette étrange bouche
Pâle et rose comme un coquillage marin⁽²⁾.

怪しい唇から口むろを差し向ける
海の貝のように蒼く、ばら色の口を。

この詩の初出は『新・十九世紀好色高踏詩集 *Le nouveau parnasse satyrique du dix-neuvième siècle*』(1866年)であり、初稿は1864年末から1865年の初め頃にトゥルノンで書かれたとされている⁽³⁾。その後、1887年に発表された『詩集 *Les poésies*』に、大幅な修正を加えられて掲載された。この『詩集』はマラルメの自筆原稿を撮影し、それを平版印刷するという、やや風変わりなもので(photolithographie)、四十七部という少部数限定で発表された。この詩にかんする注釈や研究論文等はほとんどなく、マラルメ研究史においては半ば黙殺された詩篇であるといつてよいだろう。従来のマラルメ像にそぐわない内容であることもさることながら、生前の事実上の決定稿であるドマン版『詩集』(1899年)に収録されていないことが理由としては大きい。よって、この詩は詩人の死後しばらくの間は読まれることはなく、再び日の目を見るのは、NRF版『詩集』(1913年)の出版を俟たなければならない。



自筆原稿

この初稿が書かれた1864年末から1865年初頭にかけての期間は、詩作を半ば放棄し、劇作へと傾倒し始めていたという点で特筆すべき時期であるといえるだろう。詩人は、六十四年十月三十日付の書簡で、友人のアンリ・カザリスに以下のように送っている。

ぼくはついに『エロディアド』に取り掛かった。きわめて新しい詩学からの噴出を余儀なくされる言語を作り出すことになるから、怖くもある。この言語は、二つの語で定義できるだろう。「事物そのものではなく、それが生み出す効果を描くこと」と⁽⁴⁾。

「きわめて新しい詩学」に依った言語の創設という新しい仕事に息巻いているマラルメであったが、事態は必ずしも好意的なばかりではない。同書簡の末尾に、詩人は以下のように書いている。

次いで、悲しくも灰色の日々を送ったのだ、そこでは

溺れた詩人が卑猥な詩を夢みる。

ほくはそれと同じことを書いた、でもそれを君に送るつもりはない。だって詩人の夜の喪失とは天の川でなくてはならないはずなのに、ほくのそれは汚い染みに過ぎないのだから⁽⁵⁾。

「卑猥 *obscène*」の語は、この時期のマラルメを説明するキーワードになるといえるだろう。同年十二月二六日、同じくカザリスに宛てた手紙に、以下のような記述がある。

詩については、ほくはもう終わっちゃったんだ。多分、ほくの脳みそには大きな穴がいくつもあいていて、長いことものを考えたり、実践したりができなくなってしまった。ひどいことに、ほくが現実の痴呆状態をもって青春時代の過剰性欲を贖うことになると、友よ、君だけは知っているはずだ⁽⁶⁾。

弱冠二二歳にして「青春時代 *jeunesse*」の過ちを回顧するのはやや大仰に過ぎる印象を与えうるが、マラルメ本人にとっては深刻な問題であった。その過ちとは「過剰性欲 *priapisme*」、すなわち精液の過度の浪費であり、それによる脳細胞の劣化によって詩が書けなくなったというのである⁽⁷⁾。「脳に穴があいている」という表現については、これに類するものが「苦い憩いに疲れて *« Las de l'amer repos... »*」(1864年)で始まる同時期の詩においてもみられ、初期マラルメが、詩が書けないことを詩の主題とするという一種撞着的な詩作を試みていたことの根拠として、これまでも度々引かれてきた。しかし、明らかに「青春時代の過剰性欲」の経験が基になっている懸案の猥褻詩には、一見そのような高尚な主題は見いだせない。ドマン版から弾かれたこの詩篇は、「詩的不能」という当時もっとも重大であったテーマから漏れ落ちた、些末なテキストに過ぎないのだろうか。

内容を検討してみると、これ以降のマラルメの作品に通じる主題を拾い上げることができる。まず一読して明らかのように、この詩は女性の同性愛を一貫したテーマとしている。ボードレールの禁断詩篇以来、女性同性愛はデカダンスにおける一潮流をなすといってもいいほどに流行していたため⁽⁸⁾、ボードレールの絶対的な影響下にあった六四年のマラルメがこうした詩を書いたとしても別段奇異なこととはみなされないであろう。また、六五年六月の友人宛書簡でその存在が初めて言及される「半獣神の午後 *« L'après-midi d'un faune »*」においても、情欲に駆り立てられた半獣神の襲来に気付かず眠り続け、ついに半獣神に攫われてしまう一組のレズビアンのカップルが登場するのである。

» <i>J'accours ; quand, à mes pieds, s'entrejoignent-</i> (<i>meurtries</i>)	僕は追い求める。僕の足元で、女が二人 (二人で居ることの
» <i>De la langueur goûtée à ce mal d'être deux)</i>	罪の憂いを舐め、それに打ちひしがれて)
» <i>Des dormeuses parmi leurs seuls bras hasardeux</i> ⁽⁹⁾ :	ただ危ない腕のあわいで眠り、絡み合うときに。 (六八-七十行)

また、「黒人女」の詩は単純な性愛の物語ではなく、非対称的な関係性での交接という構図を伴っていることは意識しておくべきだろう。それは、「哀れな少女 *une enfant triste*」を、黒人女が一方的に「味わいたがる *Veut goûter*」という最初の一文から始まり、最終連において少女が「生贄 *victime*」と化していることから明らかで、さらに、この二人の性愛体験の量的、質的な差が、それぞれ「若摘みの果実 *de fruits nouveaux*」、「狼藉 *rusés travaux*」という語句によって暗示されているのである。リトレ辞典によると、「*rusé*」は「*ruse*をもつ」と説明され、そして「*ruse*」は、第一に「狩人に捕まりそうなきに野ウサギ、シカ、キツネなどがするような迂回 *Détours, expédients du lièvre, du cerf, du renard, quand on les chasse*」とあり、次いで「人をだます手段 *Moyen qu'on emploie pour tromper.*」と説明される⁽¹⁰⁾。「少女を味わおうとする」女の仕事は、形容詞 *rusé* によって、年長ゆえの狡猾さと同時に一種の獣性を帯びているといってもいいだろう。これは、第三連の「ガゼル *gazelle*」や「象 *éléphant*」といった、やや唐突にも映る動物の比喩の伏線にもなっており、この詩全体が、一つの「狩猟」の物語を形成しているのである。

また、こちらもある種の「狩猟」の物語である「半獣神の午後」において、さらに同様のテーマが見いだせる。

« <i>Mon crime, c'est d'avoir gai de vaincre ces peurs</i>	僕の罪は、不実な恐怖に打ち克ったことに
» <i>Traîtresses, divisé la touffe échevelée</i>	浮かれて、神々があれほど強く結びつけ
» <i>De baisers que les dieux gardaient si bien mêlée ;</i>	寝乱れた毛の茂みを引き離れたことだ
» <i>Car, à peine j'allais cacher un rire ardent</i>	なぜなら、結ばれたことを喜ぶ髪の下に
» <i>Sous les replis heureux d'une seule (gardant</i>	熱い笑いを隠そうとするや (純白の羽を
» <i>Par un doigt simple, afin que sa candeur de plume</i>	<u>燃えあがる姉の興奮</u> で赤く染めるために
» <i>Se teignît à l'émoi de sa sœur qui s'allume.</i>	指一本で抑えつつ、
» <i>La petite, naïve et ne rougissant pas</i> ⁽¹¹⁾ :)	<u>妹のほうは、頬を染めもしないほどに無垢だ)</u>

(八二-八九行)

上記を見てもわかるように、攫われた二人のニンフのうち、年長の方が快樂に頬を赤らめている一方で、年少者はその紅潮の意味を理解しないほどに無垢であるというのである。この「姉」には、黒人女のような老獪さは必ずしも感じられないが、同性愛者の女性が登場し、その情交が年長、年少という非対称的な関係においてなされているという道具立てが引き継がれているという点は意識してよいだろう。

第一連において今一つ注目したいのは、女を衝き動かしている「邪気 *démon*」の語である。マラルメの作品において、この語はしばしば人間を不吉な行動へとといざなうものとして登場する。「ペニユルチエームは死んだ *« La Pénultième est morte »*」という、「不条理な文言の呪われた断片

lambeaux maudits d'une phrase absurde」の起源を求めてさまよう詩人の苦悩を描いた散文詩には「類推の魔 « Le démon de l'analogie »⁽¹²⁾」というタイトルが与えられている。また、「エロディアード « Hérodiane »」においては、潔癖なナルシストであるエロディアードが、不用意な乳母に髪を触られそうになったとき、以下のような言葉を吐く。

ah ! conte-moi
Quel sûr démon te jette en le sinistre émoi,
Ce baiser, ces parfums offerts et, le dirai-je⁽¹³⁾ ?

ああ！ 言いなさい
どんな頑強な邪気が不穏な気を起させたのか？
接吻も、香水を差し出したのも、言いたくない
(五六-五九行)

リトレ辞典において、この語は①「古代多神教において、善や悪の才、精神 *Dans le polythéisme ancien, génie, esprit bon ou mauvais*」、②「キリスト教における悪魔 *Dans la religion chrétienne, les diables*」、③「他者を苦しめて喜ぶ、邪悪な人 *Personne méchante qui se plaît à tourmenter les autres*」、④「直感（靈感）による、善や悪の衝動 *La cause de l'inspiration, des impulsions bonnes ou mauvaises*」と説明されており⁽¹⁴⁾、基本的な意味は「人間の行動を支配する外的な力」であることと、「それが邪悪な性質を帯びている」という二つの要素からなる。前者については①④のように「善 *bon*」をも含む中立な表現もみられるものの、②③については善が完全に排除されており、全体的な印象としては悪意に傾斜した語であるとみなしていいだろう。人間の理性では如何ともしがたい情動を喚起するという点では、「黒人女」の詩におけるこの語の選択は実に妥当であるといえる。

さて、次章も引き続き二連以下を見てゆくが、第一連以上に初稿と決定稿の違いが大きいので、一度ここで章を改め、初稿を引用することから始めたい。

『新・十九世紀好色高踏詩集』

Une négresse, par le démon secouée,
Veut goûter une triste enfant aux fruits nouveaux,
Criminelle innocente en sa robe trouée,
Et la goinfre s'apprête à de rusés travaux.

一人の黒人女が、邪気に衝かれて、
若摘みの果実の少女を味わいたがる、
穴のあいたローブにくままれた、穢れなき罪人を、
そしてこの大喰らい、狼藉の手筈は整った。

Sur son ventre elle allonge en bête ses tétines,
Heureuse d'être nue, et s'acharne à saisir_
Ses deux pieds écartés en l'air dans ses bottines,

腹の上まで、女は獣めいて乳房を延ばし、
裸であることを悦び、そして我を忘れる
ボティーヌを履いた足を開いて掴んで -

Dont l'indécente vue augmente son plaisir;

空へ掲げることに、

その痴態を見られると、快樂は増す

Puis, près de la chair blanche aux maigreurs de gazelle,

次いで、痩せこけたガゼルの白い肢体が、

Qui tremble, sur le dos, comme un fol éléphant,

震える傍らで、気の触れた象のように -

Renversée, elle attend et s'admire avec zèle,

仰向けの女は、

En riant de ses dents naïves à l'enfant ;

裏返って、待ち構え、しとどに蠱わされて、
生まれつきの歯を見せながら少女に笑いかける。

Et, dans ses jambes quand la victime se couche,

そして、生贄が横たわるとき、両足の中で、

Levant une peau noire ouverte sous le crin,

女は、鬘の下に開く黒い肌を揚げつつ、

Avance le palais de cette infâme bouche

忌まわしい唇から口むろを差し向ける

Pâle et rose comme un coquillage marin⁽¹⁵⁾.

海の貝のように蒼く、ばら色の口を。

以上が、懸案の詩の初稿で、『新・十九世紀好色詩集』（1866年）に収録されたテキストの全文である。マラルメがこの詩について語ることはほとんどないが、1865年一月十五日付のアンリ・カザリス宛の書簡に、この詩についての言及がみられる。

ぼくがアルマン・ルノー氏に書き送った詩を頼んでくれ、彼は、この描写がまったく造形的で外面的であるのに、残忍さを感じ取ったそうだ。それはぼくの狙いだけどね。ぼくは、いま思いついている他の二篇の詩と一緒に、「卑猥なタブロー」の題で、マラシ氏の『好色高踏詩集』にこれを送るつもりだ⁽¹⁶⁾。

この記述からは、当時のマラルメが「造形的で外面的な描写」によって、読者に「残忍さ」を感じさせようという、それなりに明確な意図によってこの詩を書いたことがわかる。また、当初予定されていた「卑猥なタブロー « Tableaux obscènes »」という題は複数形になっており、「他の二篇」という語句とともに、マラルメがこれを少なくとも三篇からなる連作にしようと試みていたことを窺わせるが、この企ては頓挫したようである。また、『新・十九世紀好色詩集』において、この詩は「ばら色の唇 « Les Lèvres roses »」という題がついているが、これはマラルメの本意によるものではなく、詩人が想定していたタイトルは「グロテスクなイメージ « Image grotesque »」であった⁽¹⁷⁾。アンリ・モンドールによると、これにごく近いヴァリエントがさらにもう一つあり、その異同は以下の通りである⁽¹⁸⁾。

	<i>Le nouveau parnasse satyrique de 19 siècle</i>	variantes
ℓ6	<i>s'acharne</i> (夢中になる)	<i>s'obstine</i> (執拗にする)
ℓ7	<i>dans ses bottines</i> (彼女の)	<i>dans des bottines</i>
ℓ8	<i>augmente</i> (高まる)	<i>ajoute à</i> (加わる)
ℓ9	<i>Puis, près</i> (次いで、近くに)	<i>Tout près</i> (近くに)

上記のフランス語テキスト内の下線は、最初に引用した決定稿と異なる部分を示している。一見してわかるように、かなりの推敲の跡が窺え、句読点の有無などのごく些末な違いをも含めると、手が加えられていないのは十二、十四、十六の三行しかない。それでいて脚韻には一つも変化が加えられていないのが一際目を引くが、まず脚韻から詩を構想するマラルメの詩学を知っている者にとってはそれほど驚くに値しないのかもしれない。

初稿と決定稿とを比べて特に異同が大きいのが第二連であり、構文的に意味がとりにくいのもそれである。決定稿から、改めてもう一度引用しよう。

À son ventre compare heureuses deux tétines	腹と幸福な両の乳房を突き合わせて
Et, si haut que la main ne le saura saisir,	そして、手で掴めないほど高くにまで、
Elle darde le choc obscur de ses bottines	女は勢いよくボティーヌを脱ぎ捨てる
Ainsi que quelque langue inhabile au plaisir.	快樂には適さない何某かの舌さながらに。

一見してまず疑問なのは、「幸福な両の乳房 *heureuses deux tétines*」が黒人女のものなのか、少女のものなのかということである。「腹 *ventre*」と「ボティーヌ *bottines*」については、所有形容詞 (*son, ses*) がある以上、主語である *elle* (= *négresse*) のものであると確定できるが、乳房のほうはそれができない。便宜的に「幸福な」と訳した *heureuses* を調べてみると、①「幸福、好機、好運を約束する *Qui promet de l'heur, de la bonne chance, de la bonne fortune.*」、②「幸福、好機、好運をもたらす *Qui procure de l'heur, de la bonne chance, de la bonne fortune.*」、③「幸福で、好機があり、好運である。人についていう *Qui a de l'heur, de la bonne chance, de la bonne fortune, en parlant des personnes.*」等とあり⁽¹⁹⁾、やはり確定できない。すなわち、①②の意味を踏まえて解釈すれば、美しさや愛らしさ、性的魅力によって相手を惹きつける (= 幸運をもたらす) という意味で少女の胸ということになり、③の意味を踏まえるならば、味わうべき生贄を前にして好機を得ているという意味で、黒人女の胸ということになるのである。

二つ目の疑問としては、三行目 *darde le choc obscur de ses bottines* がどういう動作なのかという点であるが、これについてはエミール・ヌーレの解説があるので、簡単に紹介しておこう。動詞 « *darder* » (投げつける、射る) は、「投げる *lancer*」、あるいは「見る *regarder*」の意味で用いられており、前者の意味で解すならば、道具 (*bottines*) と得られる効果 (*le choc*) の反転を考慮して、

「衝撃を得るためにポティーンを投げる」という意味になる。そして、この反転は動作の暴力性を強調する効果をもたらすのである。後者の解釈では、「まなざし *regard*」が省略されていると考えられ、「見る」という行為の意図を示す効果がある⁽²⁰⁾。ここでは、前者の解釈を参考に、「脱ぎ捨てる」と訳した。なお、この衝撃が「黒い *obscur*」のは、履いている靴の色が黒であるからということで説明がつかさう。さらに、「ポティーン」が、皮革製のショートブーツで、フェティッシュな関心をそそる道具として用いられうることは注意しておきたい⁽²¹⁾。

一つ目の問題は、初稿と比較すると動作が理解しやすいかもしれない。

Sur son ventre elle allonge en bête ses tétines,
Heureuse d'être nue, et s'acharne à saisir
Ses deux pieds écartés en l'air dans ses bottines,
Dont l'indécente vue augmente son plaisir;

腹の上まで、女は獣めいて乳房を延ばし、
裸であることを悦び、そして我を忘れる
ポティーンを履いた足を開いて掴んで -
空へ掲げることに、
その痴態を見られると、快樂は増す

これを見ると、腹と胸のいずれもが主語である *elle* (= *négresse*) に属するものであることがわかる。胸を腹の方に近づけるのは、両足を広げて上に広げるためであり、この体勢によって、「裸であることを悦ぶ」ことができるのと同時に、性器を丸出しにする痴態 (*indécente*) によって、露出症的な快樂が生じているのである。決定稿が、初稿にある動作をそのままに、より抽象的に表現しているとしたら、決定稿にある衝撃 (*choc*) とは、足を振り上げる勢いであると同時に、快樂の大きさの表現でもあるといえるのだ。これを図にすると右のようになるだろう。(図1)



(図1)

そうすると、初稿、決定稿の両方にある「裏返って *renversée*」の解釈も変わってくる。

sur le dos tel un fol éléphant
Renversée elle attend et s'admire avec zèle,

気の触れた象のように仰向けの女は
裏返って待ち構え、しとどに蠱^{まど}わされて

構文的には「裏返って仰向けになる」というと読む方が自然であろうが、図1を見てもわかるように、この人物はすでに仰向けになっているのであり、「仰向けの状態から裏返る」と解する方が妥当である。しかしながら、そうだとでも最終連での展開を考えるとどうつ伏せになるとはやや考え難いので、ここでは「起き上がって」くらいに解するのがいいだろう。

最終連は、女性器の比喩として「貝 *coquillage*」が使われているのが特徴的である。ヴェルレーヌの「貝 « Les coquillages »」は、この記述の影響を受けているらしい。

Chaque coquillage incrusté	わたしたちが愛しあった洞窟に
Dans la grotte où nous nous aimâmes	嵌め込まれた貝それぞれは
A sa particularité.	彩りさまざま。
L'un a la pourpre de nos âmes	一方は、心臓から抜き取られた
Dérobée au sang de nos cœurs	魂の赤むらさき
Quand je brûle et que tu t'enflames ;	わたしが焦がれ、あなたが燃え上がる時
Cet autre affecte tes langueurs	その他は、あなたの憂いと
Et tes pâleurs alors que, lasse,	蒼白の肌のように、あなたはというと、疲れて、
Tu m'en veux de mes yeux moqueurs ;	からかうわたしの目を怒っているのに
Celui-ci contrefait la grâce	こっちの貝は、あなたの耳の
De ton oreille, et celui-là	かわいい形、あっちの貝は
Ta nuque rose, courte et grasse ;	ぽっちゃりと短い、ばら色の頸のよう
Mais un, entre autres, me troubla ⁽²²⁾ .	でも唯一つ、とりわけて、わたしを惑わしたの。

変わったところでは、ジャン・コクトーの「墓 *tombeaux*」詩群の一つ「サッフォーの墓 « Tombeau de Sapho »」に、同様の比喩がみられる。

Voici, toute en cendres, Sapho,	すっかりと砂に埋もれたサッフォー
Dont ce fut le moindre défaut	彼女の最も小さな過ちは
D'aimer, Vénus, les coquillages	ヴィーナスよ、あなたが海辺で開いた
Que vous entr'ouvrez sur les plages ⁽²³⁾ .	貝を愛したことだった。

「生贄が横たわる足の間 *dans ses jambes [...] la victime se couche*」という表現は様々な想像を掻き立てるが、大まかに、横たわる生贄に上から覆いかぶさるか、あるいは自らもまた横たわって生贄を足の上に横たわらせる、の二つの解釈に分けられるだろう。前者の解釈では図2 (Gerda Wegener, *Les délassément d'Eros*, 1925) のように⁽²⁴⁾、後者では図3 (André Collot, *La semaine secrète de Sapho*, 1926) のようになるだろう⁽²⁵⁾。論者としては、十五行目の動詞「差し向ける *avancer*」

の能動性を尊重して、前者の解釈を推したい。



(図2)



(図3)

「黒人女」とは。作品群における位置

さて、ここまで注解的に読んできた「黒人女」の詩であるが、このテキストは、マラルメの作品群においてどのように位置づけるべきであろうか。最後に一つの仮説を述べておきたい。そのための対照資料として、「僕の本はパフォスの名に閉じられる « Mes bouquins refermés sur le nom de Paphos »」を挙げよう。

Mes bouquins refermés sur le nom de Paphos,
Il m'amuse d'élire avec le seul génie
Une ruine, par mille écumes bénie
Sous l'hyacinthe, au loin, de ses jours triomphaux.

Courez le froid avec ses silences de faux,
Je n'y hululerai pas de vide nénie
Si ce très blanc ébat au ras du sol dénie
A tout site l'honneur du paysage faux.

Ma faim qui d'aucuns fruits ici ne se régale
Trouve en leur docte manque une saveur égale :
Qu'un éclate de chair humain et parfumant !

僕の本はパフォスの名に閉じられる
僕を楽しませるのは、唯一つのひらめきで
千の泡に祝われた廃墟を選びだすこと
彼方、誇るべき日々のヒュアキントスの下に。

冷たさよ走れ、鎌の静けさの幾太刀をもって
意味のない弔いの歌などは歌うまい
もし、地上のかくも白いたわむれが
いずこも偽りの景との榮譽を拒むとしても。

僕の飢えは、浮世のどんな実も喜ばず
その博識な欠乏のうちに同じ味を見出すのだ。
人間の匂いたつ肉の実よ、爆ぜるがいい！

Le pied sur quelque guivre où notre amour tisonne
Je pense plus longtemps peut-être éperdument
A l'autre, au sein brûlé d'une amazone⁽²⁶⁾.

僕たちの愛が焼き返される何がしの蟒蛇を足蹴に
僕は、より長らく、きっと狂ったように
他の胸、古のアマゾーンの焼かれた胸を想う。

この詩は 1887 年に『独立評論 *Revue indépendante*』で発表されたのが初出で、「黒人女」の詩と同様に、自筆写真版『詩集』（1887 年）にも収録された。この詩集においてはとりわけ目立った役割はないが、以降の単行本においては、決定稿であるドマン版を含めてすべて巻末に配置されており、「本が閉じられる *bouquins refermés*」という冒頭の語句も相俟って、象徴的な役割を与えられているようである。

情景を要約すると、この詩において、詩人は冬の日の暖炉の前で本を読んでおり、同じ部屋には愛人が同席している。全体を通して、非現実への傾倒というマラルメらしい主題が展開されるが、鮮やかな起承転結の様相を呈するこの詩の「転」にあたる第三連については、少々説明しておこう。ヌーレによると、「博識な欠乏 *docte manque*」とは、精神にかかわる果実のことをいうのであり、本を閉じることによってその味わいが失われ、その代わりに「人間の匂いたつ肉の実 *un [fruit] de chair humain et parfumant*」である愛人の現実の乳房が眼前にあることに楽しみを覚えているのだという⁽²⁷⁾。また、マルシャルはこの場面に、「偽りの景との栄誉 *l'honneur du paysage faux*」と「博識な欠乏」、すなわち夢想と現実をとりまく理想的な均衡状態の発見を指摘している⁽²⁸⁾。その結果表出するのが、最終連における現実のセクシャリティの克服である。マルシャルも指摘するように、蟒蛇 (*guivre*) は樂園喪失の誘惑の蛇のことで、それを足下に置くのは、拒絶よりもむしろ支配を意味している⁽²⁹⁾。

ここで、「黒人女」の詩の第一連を思い出してみよう。初稿、決定稿のどちらにもあるように、少女の肉体は「罪深い *criminels(elle)*」と表現されているのである。この少女が罪深いのは、黒人女を誘惑するゆえである⁽³⁰⁾。だとすると、女の営為を修飾する *rusé* の語の効果がより効果的に映ってくる。先にもみたように、*ruse* とは、狩人が仕掛けた罠を避けて餌を食べようとする野生動物の迂回行動を指すのだから。したがって、この罪深き少女は黒人女に味わわれる「生贄」であると同時に、女を衝き動かす「邪気」そのものであり、黒人女もまた、「生贄」を味わう狩猟者であると同時に、「邪気」の罠に捕らわれた獲物なのである。

「黒人女」の詩の主人公は、「青春時代の過剰性欲」という邪気にとり憑かれた若き日の詩人の投影であり、少女の形をした罪深い誘惑に屈してしまった存在である。「パフォス」の詩が「不在の性 *une sensualité de l'absence*⁽³¹⁾」への到達の物語だとすると、「黒人女」の詩は、現実の卑猥な想念にとらわれた詩人の苦悩の物語なのである。

注

- (1) このイメージは、アンリ・モンドールによる世界初のマラルメの評伝における記述に端を発するといっていだらう。曰く、「こうした集積〔モンドールが集めた書簡などの資料〕が、一人の象牙の塔の詩人の、輝きも表立った事件もないが、奇妙にも熱烈な人生を蘇らせてきた。」(Leur réunion faisait revivre peu à peu l'aventure sans éclat, sans drame apparent, mais singulièrement ardente, d'un poète de tour ivoire. Mondor, *Vie de Mallarmé*, Gallimard, 1940, p. 7.)
- (2) Stéphane Mallarmé, « Une négresse... » dans *Œuvres complètes*, Tome I, Édition établie et annoté par Bertrand Marchal, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1998, pp. 55-6. (以下、OC, Tome I, II)
- (3) « Notes et variantes » dans Stéphane Mallarmé, *Œuvres complètes*, édition établie et annoté par Henri Mondor et G. Jean-Aubry, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1945, p. 1418.
- (4) J'ai enfin commencé mon *Hérodias*. Avec terreur, car j'invente une langue qui doit nécessairement jaillir d'une poétique très nouvelle, que je pourrais définir en ces deux mots : *Peindre, non la chose, mais l'effet qu'elle produit*. (Stéphane Mallarmé, « Lettre à Henri Cazalis, 30 Octobre 1864 » dans *Correspondances 1854-1898*, Édition établie, présentée et annotée par Bertrand Marchal, Gallimard, 2019, p. 112.)
- (5) Puis il a fait de ces jours tristes et gris où // *Le poète noyé rêve des vers obscènes*. // J'en ai même écrit, mais je ne te les enverrai pas, parce que les pertes nocturnes d'un poète ne devraient être que des voies lactées ; et que la mienne n'est qu'une vilaine tache. (Ibidem.)
- (6) Pour les vers, je suis fini, je crois : il y a de grandes lacunes dans mon cerveau qui est devenu incapable d'une pensée suivie et d'application. J'expie cruellement, par un réel abruissement, toi seul le sais ; mon ami, le priapisme de ma jeunesse. (« Lettre à Henri Cazalis, 26 Décembre 1864 » dans *Correspondances, op. cit.*, p. 117.)
- (7) 過度の射精が身体に害をもたらすという発想は、十八世紀以来の「自慰害悪論」に通じるものがあるかもしれない。これについては、石川弘義『マスターベーションの歴史』(作品社、2001年)に詳しい。
- (8) Nicole Albert, *Lesbien Decadance*, translated by Nancy Erber and William A. Peniston, Harrington Park Press, 2016.
- (9) OC, Tome I, p. 24
- (10) É. Littré, « ruse » dans *Dictionnaire de la langue française*, Tome 4, 1874, p. 1785.
- (11) OC, Tome I, p. 25
- (12) OC, tome II, pp. 86-8.
- (13) OC, Tome I, p. 19
- (14) É. Littré, « démon » dans *Dictionnaire de la langue française*, Tome 2, 1874, p. 1052.
- (15) Mallarmé, « Les lèvres roses », dans *Le Nouveaux parnasse satyrique du dix-neuvième siècle*, Eleutheropolis, Bruxelles, 1866, p. 146.
- (16) Demande à Armand Renaud des vers que je lui ai griffonnés, et dont il a parfaitement senti la cruauté, malgré que la description soit toute plastique et extérieure : j'avais essayé d'arriver à cela. Je les destine ; avec deux autres que j'ai en tête, au *Parnasse satyrique* de Malassis sous le nom de *Tableaux obscènes*. (Mallarmé,

Correspondances, *op. cit.*, p. 120.)

- (17) シトロンはこの詩の成立の背景に、マラルメが十七世紀リベルタン詩人の伝統に通暁していたことがあると指摘している。これが事実だとしたら、マラルメが本来想定していた題における「グロテスク *grotesque*」の語が、現行の「奇妙」「不気味」といった意味で使われているのか、芸術様式の用語として使われているのかは留保の余地があるだろう。Mallarmé, *Poésies, textes présentés et commentaires* par Pierre Citron, Imprimerie nationale, 1986, p. 343.
- (18) « Notes et variantes » de Mondor et G. Jean-Aubry, *op. cit.*, p. 1419.
- (19) 以後 13 まで意味が列挙されているが、省略。É. Littré, « heureux » dans *Dictionnaire de la langue française*, Tome 2, p. 2020.
- (20) Emile Noulet, *L'œuvre poétique de Stéphane Mallarmé*, Bruxelles, Jacques Antoine, 1974 (réimpression de l'édition de 1940), p. 369.
- (21) 性科学の発展が目まじしかった十九世紀末には、このような「症例」を列挙する医学書が多数ある。Paul Garnier, « Fétichisme des bottines de femme » dans *Les Fétichistes pervers et invertis sexuels*, Librairie J. – B. Baillièrre et Fils, 1896, pp. 29-35.
- (22) Verlaine, « Les coquillages » dans *Fête Galante* dans *Œuvres poétiques*, Édition de Jacque Robichez, Garnier Frères, 1969, p. 87.
- (23) Jean Cocteau, « Tombeau de Sapho » dans *Vocabulaire* dans *Œuvres poétiques complètes*, Édition publiée sous la direction de Michel Décaudin avec la collaboration de Monique Bourdin, Pierre Caizergues, David Gullentops, Léon Somville et Michel Vanhelleputte, « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 319.
- (24) Gerda Wegener, *Les délasement d'Eros*, cité dans Claudine Brécourt-Villars, *Petit glossaire de l'érotisme saphique 1880-1930*, Jean-Jacques Pauvert, 1980, p. 58.
- (25) André Collot, illustration pour *La semaine secrète de Sapho*, cité dans *Petit glossaire.*, *ibid.*, p. 103.
- (26) Mallarmé, « Mes bouquins refermés... », dans *OC*, Tome I, pp. 44-45.
- (27) Noulet, *L'œuvre poétique de Stéphane Mallarmé*, *op. cit.*, p. 446.
- (28) Bertrand Marchal, *Lecture de Mallarmé: Poésies, Igitur, Le coup de dés*, Librairie José Corti, 1985, p. 258.
- (29) *Ibid.*, 259.
- (30) Noulet, *op. cit.*, p. 369.
- (31) Marchal, *Lecture*, *op. cit.*, p. 259.

